こんな若者がいる

真実を求めている新労の仲間

――一宣伝班員より

今年の二月から、三池労組には、冬の厳しさばかりではありませんでした。最近では汗をかきかき、少し要領をおぼえてきましたものの……。

これは、九月四日の日曜日のこと。顔の見えない仲間達に呼びかけるのは、何んとなくはり合いが抜けがちです。そこに、ニコニコ顔の仲間のさし入れでした。ホッとしたり、勇気が湧いたり。

ところで、一人の、肩幅のガッチリして見上げるような一新労青年が、その日曜から数日経たある日、私にこんなことを話してきてくれました。

「毎日毎日高温と湿気の中で目汁鼻汁が続き、弁当は立ったまま喰っています。肩の皮は五度もむけ変りましたが、なんとかあと二日、あと一日、と日曜日が来るのを心待ちにして仕事に出ています。日曜日ともなると、お昼すぎまでぐっすり眠むっています。

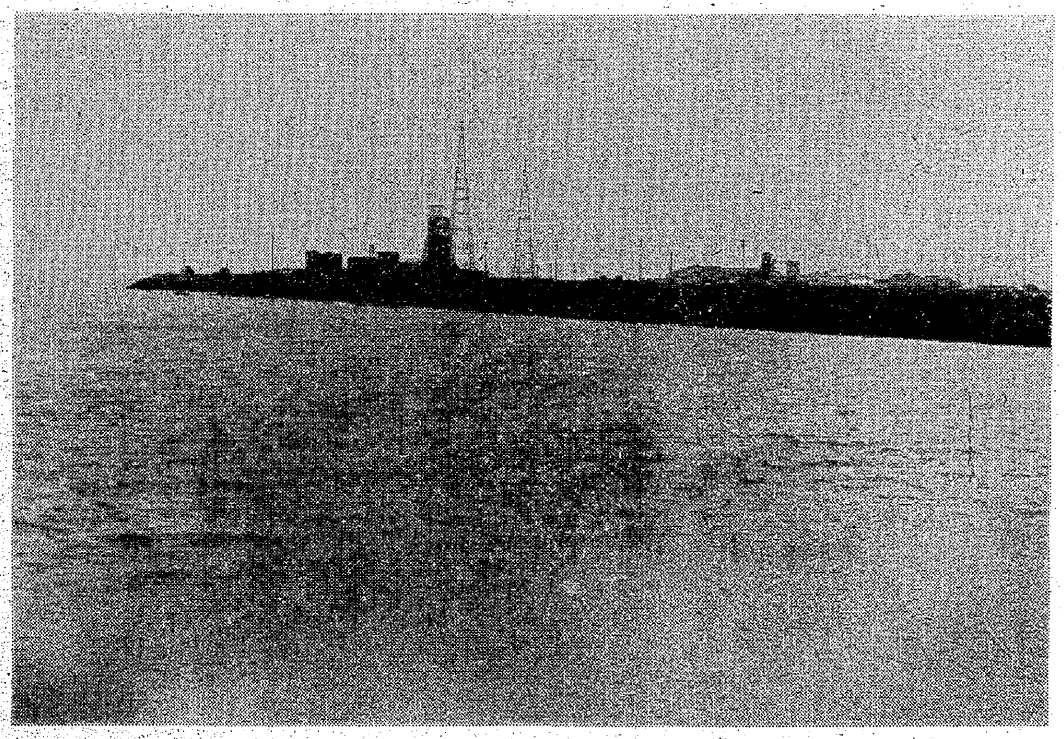
九月四日もそんな時でした。妻が、『お父さん起きて』とゆり起こすのです。『今ニュースカーが来て、お父さんの体や保安を守ることと、熊本参議員補選へ一票を投ずることと結びつけて訴えています。投票に行きましょう』、というのです。

日頃、妻は私がもらって来た三池労組のビラや職場新聞を、一枚一枚きれいに綴じて大切に保存しています。そのビラを見ながら、これが本当だ、これこそ真実だ、と私を説得するんですよ。

私は、長距離のトラック運転手をしていたのですが、実は、選挙に一回も行ったことがないんです。初めて、妻と子供と一緒に投票所へ行きました。そして、子供を遊びに連れて行きました」

私はこの話しを聞いて、私達や三池労組が取り組んでいる色々な呼びかけや、人間的なつながりを強める活動の中で、新労の仲間達は真剣に耳をかたむけ、一緒に考えていてくれるのだな、と改めて思い知らされたものでした。

三池の将来を、やがてはこんな若者が支えてくれるのではないだろうか、と思わぬところまで私の思いはふくらんでゆくのですよ。



南新開竪坑は宮浦鉱閉山、有明鉱合併の合理化のなかで揺らいでいる。一見何ごともないそのただずまいの下の地底では、今はげしい労働に寸秒の暇もなく、仲間たちが追いまくられている。

検証にドロ塗る会社

はしごは何を見てきたか

別項記事にあるように、二日三川鉱の坑底で、上村裁判に関する実地検証が行なわれた。裁判官や、原告と被告双方の弁護士などが入坑して検証を行なった。ゆく先々の坑道は隅々にいたるまで整理や清掃がゆきとどき、こんなところで重大災害が起こったことなど「まさか」と疑わせた。だが、その陰にかくされていたものは何であったか。新労組員から寄せられた次の手記が、恐ろしい事実のありのままを告発している。検証にドロを塗る会社のやり方だ。

新労組員の手記

今年の八月は、三池炭鉱にとっても私達にとっても大変な時だったのではないでしょうか。

八月三日には、宮浦鉱で打越さんが遺体になって昇坑するし、三川鉱では、八月二十三日園田さんが風呂場でバッタリ、死亡しましたし、自然発火がからくも事前に発見されたり……。

四ツ山鉱では、炭車が二百メートルも逸走するし、プランジャーが燃えて一斉CO検診が二十余人にも。

とにかく、八月の盆休みをはさんで、災害が連続的に起こったものですから、八月末の一週間は、そりゃ大変なものでした。

真っ黒になった坑道に岩粉散布をするやら、散水するやら。それに水袋の修理に補給、人道の整備やガラクタ整理。はては材料をあっちへやったり、こっちへやったり。残業々々で、それこそ息をつく暇さえ与えられませんでした。

九月に入ってからのことです。上層六十のベルト・コンベヤー坑道のベルトを越えるのに垂直のはしごが作られています。その上にさらに階段のゆるやかなはしごを作れ、というのです。

はしごの勾配をゆるやかにすれば車道の真中に足が立ってしまい、そのため千メートル近くも運搬ができなくなり、明らかに保安違反にもなるのです。係員はそれを「一日ではしごは解いてしまうのだから、とにかく作ってくれ」、とのことでした。

九月二日のことです。C作業者（常一）は一斉に四十分の早出（採炭一番人車）をして岩粉を散布し、坑道整理をやってくれ、とのことです。「連続災害対策にしてはおかしいなあ」、と思いました。

そうこうするうち、十人近くの人が近ずいて来ました。そのうちの一人に「何事ですか」と尋ねて見ました。

昭和四十二年九月二十八日に三川鉱で自然発火が起き、上村さんという方が死亡され、裁判になっており、その実施検証とかで、裁判官や弁護士といった人々が入坑された、とのことでした。「なるほど、そうだったのか」、とはじめてすべてが納得できたのでした。

「それにしても」と、近くにいたある職種の主席係員が私の耳もとに、「月に一回位いエライ人が入坑してもらった方が、保安も良くなるばい。日頃仕事々々といって、保安がかえりみられないけど、今日の出炭を見てごらん、保安が立派に守られているのに、ちっとも出炭減にもなっとらん。保安にしても、生産にしても、坑道が美しく整備されることが一番。考えると、俺達が常日頃いかに生産にばかり追いまわされて、心の余裕を失なっているか、を見せつけられた感じだな」、と語ってくれました。

例のはしごの件ですが、その後そのままです。非常に登り降りしやすいとかで、当の係員は、はしごを解いたものかどうか、迷っているらしいです。

そこを通る仲間が、朝と帰りにはきまって指さしながら、「いつまで持つだろう」と、はしごの話題でもち切りです。

保安体制の強化を

炭労保安調査団が 会社に7項目要求

四日炭労調査団が来組、翌五日四山と三川の両鉱の坑内にさがりその保安状況を点検。後三池労組執行部と、保安維持上の問題点を七項目に集約、ただちに会社に対して「坑内保安を確保するため、さらに体制を強めるよう」要求を提出した。同調査団は来組に先だち、長崎の高島炭鉱（八月二十四日死亡災害をひき起こした同炭鉱は、長崎鉱山保安監督局の指示にもとずいて操業停止中）の実情も調査したが、三池では古賀炭労次長を団長に、相沢北海道炭労次長、三池労組執行部が加わり調査・点検を行なった。

要求は、長期操業計画にともなう保安計画から、さらに冷凍能力を強めて坑内温度を三十度以下に保つことや、熱風管理上に不可欠な技術の開発などに及んでいる。

この要求に会社は一部については受け容れながらも、重要な問題に限り回答を避けた態度は、見逃すことはできないことだろう。

立川地区労ニュース

来年からは三池との定例交流を

東京　浜崎　保

八月六日、大牟田駅に降りたつと、三池労組の皆さんが出迎えてくれました。

駅前からただちに交流宿泊となり、私は調布市職、府中市職の仲間と共に新港地域分会へ案内されました。

夕食のあと、地域分会の皆さんと交流会がもたれました。今は三池労組は八百名で、第二組合は四千名だそうですが、奥さんたち一人ひとりが私たちは家族ぐるみで闘ってきた、これからも闘ってゆくと、生活からにじみ出る闘いの決意をごく当たり前に、しかも労働者の未来を切り開いてゆくために、三池労組の旗のもとに固く団結してゆく話に、胸が熱くなりました。三池闘争からCO闘争へと着実に前進してゆく闘いの厳しさと運動の本質にふれたように思いました。

次の日、三池闘争の映画を見、山下書記次長の講演を聞きましたが、労働運動とは何か、労働者階級とは何かを改めて勉強させられました。三池の皆さんのすばらしさを一日の交流では理解しきれませんが、何よりも闘争の経験と理論武装の深さは、東京では見当たらない感じです。

感想をまとめると、大衆闘争路線が貫徹されており、組合員と家族を含めた同志愛が、長い闘いを通して確立されている。

CO闘争・命と権利を守る闘いは、全労働者共通の闘いであり、三池労働者は三井独占資本と対決しながら、全国の労働者との団結をすすめている。「理論が大衆をつかむや否や、物質的力となる」という言葉が、交流を通じて初めてわかりました。

来年からはぜひ、三池労組との交流を定例化してほしいと思います。

×

右の文は、〝立川地区労ニュース〟（三多摩地労協傘下＝東京都立川市曙町二―一五―二〇）に掲載されていたもので、浜崎さんは同昭島市職青婦部長として活躍されています。これから手をとり合って、がんばってゆきましょう。